



信州の秋

小林雨峰

(二)

今日は赤田村にゆく、家は高き山上にあり、煙火の氣なくして、静寂響ふるに物なし。搗て、秋雨は午後より降りしきりて、檐滴の調子よき音のせるが、夜を徹して止まず。(廿六日)

棧道を辿りて、朝早く再び篠の井に戻りて、そ

こより、長野に向ふ。名にしおふ善光寺詣でも二度三度となりては珍らしくなし、まして後生を願う野心もなければ、本願上人も大勸進もわれにとりてはさばかりの信心も起らず。いや、わが信仰とは愚夫愚婦と共に氣息めにする信仰にあらねばなど、なま悟りと云はれんも詮なければども、自らの心なればかくは白狀して世を欺き人を偽る似非信者の面皮を剥ぎ置くべし。

城山館に上る、眼下六郡の山河を望む、千曲川の流は鮮かに掌上にあり。西北は善光寺の伽藍を儼りて山巒屏を列べ、遠きは翠色滴るが如し。此地秋尚早くして、天に落木の聲なく、地に蟲聲の涼を帯ぶをさく。

見渡す限りの平田は、稱して善光寺平と云ふなり、地は山を界して、一帯平坦の境域を餘す。稻

香こぼるゝ斗りに穂は實りてうなだれつゝあり、
豊年の喜びも偲はる。

善光寺を背らにして、東の方川田村に向へば、
南より西に掛けての山々の姿は、今迄手に取る如
く鮮麗なりしもの、倏忽にして其の姿を變しぬ、
西南の方にあたりて、雲雨濛々として湧きたらぬ、
宛がら大軍の襲ひ來りたらんかと思へる間に東の方
山の一角、またく黒雲俄かに湧きかへりぬ。其
の勢は、直ちに西の方にと奔りゆきて、西軍を衝
くが如く、満天の凄氣、われは今鬼神に後襟引搔
るゝ如くなりぬ。愴然たり、悽然たり。
北の方善光寺裏山をかけて飯繩、戸隱の方を望
めば深碧いよく濃く、印度藍を抹したるが如く、
一角の鮮影を餘せり、見る間に東南の山は洗ひし
如くなりて、雲の切れ目に碧空ほつと現はれぬ。

暴風の兆にやなそ氣遣ふ。

千曲川の澗に至れば水聲どうくとして當年の
軍馬銜枚の傑と思はる。急流幾曲折するところ
ろ、千曲の名にふさはし。岸に生へる蘆葦兼葭、
風に靡きてさらく音なすも心地よし。あゝ秋は
全く深くなりたるなり。

無造作に架せられたる橋を渡りて、川田村にとつ
く、山を離れて僅かに人間に入りし思あり、家に
面せる山には、既に白き雲綿を亂せるが如くか、
れり、暮れんとする空は、この家を圍んで早くも
旗雲の襲ふが如く見ゆ、今夜星の空に飛ぶを見る
を得べきかとして寝ぬ。(廿七日)

あはれ「自然」が人を感ぜしめ、人を弄ぶところ、
人工をもて人を育むに勝るものあるか。見よ、山
の姿の寸時、分秒、刻々に變じ、時々に移るが中

に、山其のもの、不動の姿勢を宿せるを。聖者の如きそれに似たらずや。心は泰然として動かざるが如きも、物に觸れ境に接して有ゆる事に變化の妙を現はし、垂訓一様ならぬ多きに考へよ。

われ山に入りて既に五日、此の間に受けたる『自然』の教訓はそも何ぞ、信州の地、由來古蹟と靈場とに富む。近時蠶業大に開け、經濟の度頗ぶる高く、世は信州の富を稱す。されどわれは此の境に於て受けたる教訓はさにあらず、不動の山巒なり、變化多き峰影なり。雨多き山々なり。雲多き山々なり。到るところの奇峭、雄渾の姿なり。水村山郭はこの信州に到りて、始めて趣多きを見るなり。秋は何れの地に到りても遍からずといふをなけれども、山の秋は格別なり。殊に信北の山の秋はまた更らに格別なり。一日たち、二日たち、過ぎく

て十月の中ばにも入らば、かの翠影は變して樺色の山とならん。野の花も、野の草も色濃く黄ばみ、果ては枯れに枯れうら寂しくなり果てん。『自然』の教訓は限りなきものなり、

われは山の奇峭雄渾なるを愛づると共に、細き路の邊の野菊を愛す。山に咲けるものはまた更らに幸多かるべし。谷川に生ふの小魚、また愛らしきものなり。自然の慈愛は思ひがけなき處に宿るを見ずや。

山路の嶮なるは云ふ迄もなけれども、自然はこの嶮を侵すの旅人を苦しましめず。また妙ならずや。疲れ果て、一樹の下、一塊の石に凭りかゝりて、彼方此方を眺むるに、直ちにわが眼はかの起伏せる峰巒、蓬勃たる雲煙、細き徑、草わけてゆく豆人寸馬の方に奪はれ、あるは遠く聞ゆる、馬

子歌に、近く聞ゆる蟲の音に、心ひかされざるかは。疲れはかくて遂に忘らるゝなり。

咽喉の濁きたるとき、石徑を下りて、ちよろちよろ、とばくする岩かげの間、叢の下を流れ流れて来る細き清水を掬へば、其の味醇體の如きものあるを知らむ。其の音の遠く〜に流れゆく嘯きを聞かずや。

『われらは此より人間の巷に出るなるよ、若しや岩石に觸るとも、われらは有ゆる苦痛を忍びて流れゆくべし。さては大舟小舟を渡すべき大江の流れともなりなん。如何なる境遇に遇はんも努めてかのが務を果さんさらば〜』と、これ溪流の嘯きにあらずや。

日は暮れたり、風音高くなりぬ、『秋繩生樹石』の趣いと深し、陰森なる樹木を繞らせる垣根越し

に、かの空を仰ぐに、星は綾羅の如くかゝれり。銀鉦をもて彩れる天井のそのの如し。夜の美はこゝに極まれり。千曲の流に落ちて碎くる星影いかならん。黒闇々たる間に閃く此の星、さなきだに、罪深き人の子の尊き聖りの教をさきて、始めて清き淨き心のふと浮びたるときに等しからずや。わはれ天上闇夜の星を仰ぎ見よ、愛らしきは闇夜の星屑の閃きにあらずや。

轡虫は墻越に鳴きて嘩々たり、其の斷續の聲人の腸を擗る。一疋の促織虫は座敷に飛び込みきたりぬ。やがては死する短き命なるべし、其の鳴く聲は何を語れる、己が死を咀ふの聲のそれならずや。『自然』はまたわれらに一樣の教訓を與ふ。

われは詩を吟ずるなり、歌に思を摑ぶるなり。虫の鳴くと何の擇ぶべきをか。而もわれは虫

の音の人の情を動す程に、詩も歌も口より出でざるぞうき。あゝわれ虫にだも如かざるか、道ゆく折雨の濃くが如く飽れなく虫の聲をきく毎に、しかく思はざるを稀なり。

檐に座してまた蒼天の星影を數へぬ、二つ四つ五つ……………

夜半眼を覺せば風風きて雨となりぬ。ぼつりくさてはざあくとふり出づ。あすはまた雨ならん。(廿八日)

(三)

雨は篠つく如く強し、露は四面を籠めて闇く、薄き煙の如く木々を繋ふ。桑の葉を撲つを見るに葉はかはるがはるに動きぬ。簀、笠さたる人の行くと見るに、鞆の如くに見えて面白し。友より信書來る長野にこよとなり。懐しさは今

朝の消息なり。雨小ぶりとなる。

赤蜻蛉の電信柱にとまれる、三つ四つ五つ趣いと多し。唐辛の細き繩に貫けるが如し。全し赤蜻蛉の倒れて雨に羽搔を取られたるが、脚下に横はれり。あはれなるまゝに拾ひぬ、澤つやしたるが雨を浴びてことにうるはしかりけるものを。

午に到りて雨はやみたり。雞の聲をそこ、にきこゆ、ゆかしきものなり。(廿九日)

朝の光りは東の山の端にきらりとかがれり。千曲の濁流音はげしくいと凄し。雲は大方はれてすがくし。ちぎれ雲かしこゝに漂ふ。善光寺の人家近く見ゆ。

風は冷かに穗末を渡る、綿の花、小豆畑に交はりて咲きたるが粟の穂列と連れり。高き唐瓜棚、低き糸瓜棚と列べる村舎目に入る。何れも自慢顔

に實れり。立つと五分時斗。

川田村の家を辭し去る。蒲蘆の間をざわ／＼と船にてすぐ、千曲川の架橋。夜來の豪雨に撤せられたればなり。こゝは千曲の犀川と合して流るゝ處なりと云ふ、川幅廣く積は一面に水なり。舟行矢よりも疾し。

堤を越え田甫を過ぎて再び長野に入る。秋山晴れて冷々骨に砒す。姨捨山に向はんとするなり。待てりし友も一行に加はる。

篠の井を経て姨捨に向ふ。東北と西北の兩山脈千曲の流を挟む。人家點々、竹林濛密、松樹疎々山の中腹高き勾配にて瀛車は走りゆくなり。

姨捨の停車場は山腹にあり、觀月遊覽の客に便せり、やゝ下りて其處に姨石あり、姨捨の名こゝに生ず、石に接して觀月堂あり。傍らに長樂寺あり。

り。石上に座して眺むるに右に鏡臺山あり、南にめぐりて冠着山あり、明月鏡臺山の頂に登るのとき、こゝに之を望めは圓鏡を掛けたるが如きものありと云ふ。惜らくはわれ月夜に會せざるを、小池あり今は水涸れたり。寶ヶ池と云ふ姨石の下にあり、前面後背山ありて連る。其の梯楷を爲すところ、眼下万頃の稻田、其の觀月堂、長樂寺に接せるだら／＼下りになれる處の稻田に月影を分映すと云へり。これ即ち田毎の月と云ふ所以なりとか、月痕印すべきにわらず、況んや中秋稻穂まだ刈り取らねは、月何とてか宿らん、田毎の名は古人の想像によれると、云ふ迄もなし。

川脈の白さと稻田の黄なると、對映頗るよし。桂の木、子袋石、こゝの名物として數らる。車橋は今あとなし、千曲川の流のみ變らず。

雲は今波を打ちたるが如く、西北の山上に浮び出でぬ。

八幡、杉の木、稻荷など云ふ小村の一望の下に人家の点在を示せる宛然箱庭の如し。淺間は群山の間より東のかたに見ゆと云へりしが、知らずして去る。北の連山に眼を配れば、脈は三層にも四層にもなりて、一層目は深翠を凝らし、二層目は薄翠に、三層目は淺青色を爲せり。四層目に至りては灰色の如くになりて、次第に薄れゆくなり。其の盡くる處の山に今雲は浮き出でたるなり。西の方飯繩、戸隠を中心として、脈は南方に驅けりぬ。雲はまた白く蓬々として覆ひかゝれり。其の南の際の山に寄りて、この停車場はあるなり。月なくも屈強の遊覽臺はこれなり。われは今歸途につくべく流車に乗りぬ、松本よ

り來れる室内の人は何れも目を舉げて窓外の風景に酔はざるなし。雲は幾重にかなれる奈雲、西の山の頂より北にかけて、もろ手を擴げぬ。變り易きは秋の空のそれと知られぬ。

稻田の幾枚ともなく層を爲して、上は段々に斜に縞目を織りて擴かるを見つゝ、流車はひた下りに下りぬ。

かくてわれらは長野よりまた更らに東の都に歸りぬ。(三十日)

幼稚園案内

東 基 吉

右の題で、本誌第三卷の第九號から書き始めたのであつたが、都合に由りて途中で中絶させたのは、頗る讀者諸君に對つて濟まなかつたと思